

ものづくり教育の実践的研究Ⅲ

—陶芸教育の教材—

The Practical Study of Handicraft Education Ⅲ

—Teaching Materials of Ceramic Art Education—

辻 泰 秀

TSUJI Yasuhide

1. はじめに

子どもたちは、工作や工芸などのものづくりが好きである。手や体全体を動かしながら、材料や用具を使って、自分らしい日用品や飾りをつくることは、楽しいことである。それにもかかわらず、学校の図画工作・美術科の授業では、描くことが中心で、ものづくりをする機会が減っている。工作や工芸は準備や後片付けが大変、つくるのに時間がかかる、材料や用具がそろっていない、指導の方法がよくわからない、刃物を使うときがある、といって戸惑う教師の声を聞くことがある。ものづくりには、材料や用具の使い方、技法などが関連し、図画工作・美術科の専門性や指導経験が求められるときがある。だからこそ、教材づくりや授業についての実践研究を進める意味がある。

教師が教材研究をして、子どもたちにとって魅力的な造形活動ができるならば、表現への意欲も促されるはずである。そのため、これまでも積極的に工作や工芸に関する教育実践に取り組んできた。「ものづくり教育の実践的研究Ⅰ」では、地域における伝統的なものづくりを子どもたちが体験を通して理解する試みについて¹⁾、「ものづくり教育の実践的研究Ⅱ」においては、岐阜県美濃市において行われてきた紙漉きや紙工作の教育実践について報告した²⁾。そして、本稿では、粘土を使った陶芸教材とその授業実践について取り上げることにする。

2. 粘土を使った教材の展開

(1) 粘土づくり・土練り

学校の教材や陶芸家の制作で使用している粘土は、自然から採取した粘土をもとにして³⁾、不純物を取り除く、土の粒を均一にする、水分を調節するなどしてつくられる。最後の土練りの段階で、粘土を手や体全体を動かしながら練って、硬さ・軟らかさを加減する、空気を出して亀裂を防ぐといった作業をする。手で粘土を練る荒練りや菊練りと呼ばれる技法を活用して、成形しやすくしている。荒練りは、粘土を長細くして両手で押さえるように練る方法であり、菊練りは、塊の中まで練るために菊の花に似た形になるように回転させる方法である。学校での教材用の粘土は、練る専用機械である土練機を通しており、袋から取り出して使えるようにしているが、中身は微妙に硬さが異なるので、改めて手で練るとよい。手軽さが好まれる時代であるが、試行錯誤しながら制作に適した粘土を準備する過程こそが、陶芸を本格的に学習する上での基礎であるといわれている。あえて粘土の採取や粘土づくりを教材化している事例もある。

(2) 成形・加飾

粘土の準備をしたら、粘土板に粘土を置いて、指や手を動かして形をつくる。土にはドロドロ・ネチネチといった手の感触や、可塑性がある。自然の土の手触りや重みが魅力になって、造形活動が継続される。手で触れながら次第につくりたいもののイメージが浮かんでくるときがあれば、あらかじめつくりたいもののイメージがあって、それに向けて造形活動が展開される場合もある。いずれの場合にも、粘土にはほどよい軟らかさや可塑性があるので、丸める・押さえる・くっつける・たたく・組み合わせる・削る・磨くといったいろいろな造形の方法を経験する。

自然材料として、土のほかに木・草・石などもある。木や石は、粘土と比べると硬いので、子どもたちが自在に形を変えるのが難しい。草や花は、枯れてしまうので色や形を保てない。土は表現の意図に応じて自在に造形ができ、陶芸かまで焼成すれば、形をそのまま保存することができる。

このように、粘土には心地よい手触りの感覚や、思いに応じて形をつくれる可塑性があるので、幼児から大人まで広い年代で親しめる造形材料になっている。幼児が園庭の土を丸める・にぎる・磨くなどして、夢中になって泥だんごをつくっている光景を目にする。また、成人のカルチャー・センターでも、粘土の実体験ができることから、陶芸の講座が人気である。

初心者は、うつわをつくるのに、粘土を手や指でひねるようにしてつくる。丸い粘土のかたまりを押し・ひねることによる玉づくりが一般的である。また、細長くした粘土を重ね合わせるひもづくりや、板状の粘土を組み合わせて接合する板づくりの技法を経験するはずである⁴⁾。

形をつくることを成形、成形した作品に模様や装飾をすることを加飾という。うつわや鉢のような形をしたものは、立体としての膨らみや量感を意識しながらつくる。土の表面のザラザラ・ツルツルといった手触り感覚や模様も工夫したい。茶碗や湯飲みのようにいろいろな方向から見た方がよい作品は、手回しのロクロを使用すると便利である。教育環境が整えば、電動ロクロを使ってつくるのもよい経験である。小学生でも2～3回使用すると、一応の操作ができるようになる。ただし、慣れない間は、しばしばうつわの形になる前に歪んでしまう。

(3) 焼成

成形や加飾した作品は、日陰で乾燥をしてから陶芸かまを使って焼成する。水分が粘土に多く含まれたまま、急な乾燥をすると、ひび割れが生じやすい。粘土を乾燥させたままでは、変形・変色・破損をするが、陶芸かまの中で750～850度で素焼きすれば、安定した形を保てる。素焼後は、植木鉢に似た材質になる。素焼きによって硬くなっているが、水分はしみ込む。かま詰めでは、乾燥をさせた作品をかまの中に並べて、支柱と棚板を使って段ごとに積み重ねていく。作品の大きさに応じて、支柱の長さを選択し、棚板を積み重ねる手順を工夫する。素焼きの前は、粘土が取れたり割れたりしやすいので、持つ位置に気をつけてそっと移動をする。

釉薬をかけて1200～1300度程で本焼きをすることで、釉薬が溶けて定着し、茶碗や湯飲みのようなガラス状の表面になる。釉薬は原材料や焼成の方法によって、多様な色合いになるので、釉薬による表現効果の工夫も試みる。ここで示した焼成温度は、一つの目安であり、温度計の設置状態や、陶芸かまの内部の構造によって、焼成の具合に若干の相違がある。

このように、陶芸かまは、素焼きで750～850度、釉薬をつけた本焼きで1200～1300度になるため、高温や大きな電氣量に耐える構造、それを置くスペースと土台が求められる。陶芸かまは、もともとは薪を燃やして温度をあげていたが、現在は、電氣・プロパンガス・灯油によるかまが普及している。電氣代はかかるが、焼成中の温度が場所によってあまり変わらないことから、電氣かまが使いやすい。かまの中の温度が外に表示され、粘土や釉薬の状態に応じて焼成温度や時間を選択できるようになっている。陶芸かまの種類によって、性能・操作方法・価格などの違いがあるので、設置時に資料をもとに検討をする⁵⁾。

焼成の設備がないときには、粘土で成形した作品の焼成を学校外に依頼する方法がある。陶芸関連の工場、陶芸家などは設備をもっており、子どもたちの作品の焼成も引き受けていただける場合がある。けれども、機会あるごとに子どもたちの意欲的な取り組み、個性豊かな作品、教育内容の特徴や教育成果を示すことで、行政や教育委員会から経費的な支援を得ている学校も多い。若干のメンテナンスは求められるが、情報や映像の機器のように、短期間のうちに更新をしていく必要はなく、長年継続して使用できる。

たとえば、岐阜県多治見市は古くから陶器の産地として知られ、地場産業として陶芸が位置づいている。そのような地域の伝統文化や特色を学校でも経験してほしいという考えから、市内の各小・中学校には、図工室や美術室に隣接して陶芸のためのスペースや、多くの作品を一度に焼成できる大きな陶芸かまが設置されている。むしろ、地元では、その設備を有効に利用して授業展開ができる図画工作・美術科教諭の育成や、陶芸に関する教材やカリキュラムの工夫が課題になってきている。教員研修、子どもの作品展、地域の陶芸作家との交流などによって、恵まれた陶芸の教育環境を活かす取り組みが行われている。

(4) 現在の動向

近年、少子化や教員の大量退職時代の影響で、図画工作・美術科を専門にする教員が減少し、粘土の造形活動の魅力を理解し、積極的に取り組む実践も少なくなっている。子どもたちが意欲的に表現活動をするには気づきながらも、粘土で汚れる、粘土・粘土板・へらなどの準備や後片付けが大変、大きな立体作品を置く保管場所がない、学校には焼成の設備がないといった理由から、授業で扱う機会がなくなっているのが実状である。

土の粘土のかわりに、焼成をしなくてもすむ粘土や、白くて軽い粘土が普及しているが、自然材料として特有の土の感触や、焼成した作品の魅力を体験したい。一見すると土の粘土に近い作品に仕上がっていても、パルプを主な原料にしているので、土の粘土のもつ手触りや量感といったものが体験できない。ひび割れは少ないものの、自然の土とは感じが異なり人工的な色をしている、部分がくっつかない、軽くて立体としての重量感がない状態である。やはり自然の粘土ならではのよさがある。

自然の土から作られた粘土を使用する場合に、伝統的には、彫塑と工芸とに分けられる。彫塑では、人や動物など立体的なモチーフを粘土でつくる。土をかき出して中を空洞にしてから焼成をする、あるいは、石膏取りをして形をうつしとるといった方法で作品化する。工芸では、うつわ・お皿・湯飲みなどの食器や花瓶などをつくる場合が多い。工芸においては、長年にわたって使う目的や用途に応じてつくることが求められてきた。ところが現代の工芸では、自己表現的な要素が強調され、オブジェとしての作品も多くなり、使う目的や用途を前提にしていない作品が増えてきている。したがって、彫塑と工芸との区別はほとんどなくなり、融合している状況である。

以下、子どもたちの造形意欲を引き出すことを目的とした陶芸の教材事例を報告する。図画工作・美術科の教師だけでなく、他教科を専門にする学級担任や、初心者教員でも指導が可能なものを取り上げ、その指導の方法や内容を明らかにするようにしたい。伝統的な陶芸の技法を習得するという体験は、もちろん貴重である。ただし、陶芸家や職人がその技法を身につけるまでには、多くの年月と研鑽を積んでいる。図画工作・美術科のわずかな時間に、陶芸家や職人と同じような成果や作品を期待することは、無理である。また、大量生産の今日では、通常の使用に十分に耐えられる良品質のうつわや皿を安価に購入できる。そのため、初心者ともいべき子どもたちに、いきなり陶芸家と同じ活動や作品内容を期待するというよりも、取り組みやすく興味をもてる教材、一人ひとりの個性的な発想をいかせることができる教材が望まれる。それらのことをふまえて、「土の鈴をつくる」「デコボコの粘土の板づくり」という素焼きによる教材について報告する。

3. 陶芸の教材事例1 「土の鈴をつくる」

(1) 教材の着眼点

土の鈴では、丸い形からいろいろなものに見立てる活動が行われる。丸い形をもとにして、くっつける・へこます・つまみ出す・穴をあけるなどの造形操作をすることで、動物・魚・野菜・人の顔などに近づける。一般の金属の鈴は、同様の球体の形をしていて、切り込みが入っている。この土の鈴においては、個性的な発想をしながら、いろいろなものに形を変える点が特徴的である。また、小さな丸い玉を中に入れ込んで焼成することによって、丸い玉がころがるたびに音になる仕組みになっている。作品や飾りとしてだけでなく、動かしながら音を出して楽しむことができる。

(2) 粘土の板・玉の作成

1 kg程のテラコッタ粘土、粘土板、ヘラ、のべ棒を準備する。テラコッタ粘土は、通常は黄土色に近いが、焼成するとテラコッタ調の赤茶色になる。粘土は1 kg毎にビニールで包んであることが多いが、10kgや20kg入りを購入し、小分けして使う方が割安である。粘土板は比較的大きなものが使いやすい。粘土へらはつくったものの細部の形を表現するのに使用する。のべ棒は、粘土を平らに延ばして板状にする際に用いる。

粘土板、ヘラ、のべ棒などは、あれば便利であるが、準備できないので造形活動が止まってしまうわけではない。後で水拭きをすれば、粘土板でなくても机の上でも大丈夫である。指先や竹串などで粘土へらのかわりになるし、手で丹念に粘土をたたけばのべ棒を使ったときと同様の板状になる。

テラコッタ粘土は、きれいな赤茶色に焼成できるので、素焼きに適しているが、信楽や瀬戸などの陶芸用の粘土でも、もちろん可能である。本焼に適した粘土は白色っぽく焼き上がる。テラコッタ粘土を基本にして、機会があれば、数種類の粘土を準備して子どもたちが選択し、焼成したときの粘土による色の違いや、焼成前後の色の変化を理解するとよい。

自然物を使った造形活動では、まず五感を通して材料とかがわかることが望まれる。粘土の場合にも、手で触れて土の感触に親しみながら、丸める・押す・へこます・くっつけるといった造形操作を体験する。粘土に親しむために、多くの粘土を使ってひものように長くする、高く積み上げるといった活動も取れ入れるようにしたい。

この土の鈴をつくるでは、まず粘土を押したたいたりしながら厚さ1 cmくらいの板状の形にする。子どもへは「大きな粘土のピザやお好み焼きをつくりましょう」「指や爪の長さと同じくらい、粘土の厚さを確かめてみましょう」といった言葉で内容を伝える。



図1. 押す・たたくことで板状にする。



図2. のべ棒を使う

手で押ししたりたたいたりしながら板状に近づける活動を通して、次第に粘土に親しむようになる。のべ棒と厚さが8mm～1cmくらいのタタラ板を使い、のべ棒を押しえながら回転させると均一の板状にしやすい。水分が多すぎるために粘土板に粘土がくっついてしまうときには、綿の布を粘土板に敷いて、板状にした後にはがす。

あわせて、板状の粘土をつくり始めるタイミングで、あらかじめビー玉よりも小さめのサイズの玉をつくって、少し乾かしておく。この玉を後で中に入れて込んで、コロコロといった鈴の音がする仕組みにする。玉の大きさの違いやころがり方によって、鈴の音色が微妙に異なるので、むしろ大きさに個人差があってもよい。

(2) 鈴全体の球体づくり

新聞紙を1・2枚丸めて、ボールのような形にして、後で芯にする。新聞紙は、げんこつやソフトボールくらいの大きさになる。たとえば魚や鳥をつくるイメージがあるときには、全くの球体よりは、できあがりの形を想定して、ラグビーボールやタマゴ形の方が好都合の場合がある。

板状にした粘土の上に丸めた新聞紙を置いてみて、新聞紙を粘土で包み込めるかを確認する。粘土の大きさに対して小さいようなときには新聞紙を重ねて巻き、大きすぎるときにはめくって適切な大きさにする。新聞紙を丸めてそのままにしておくと、形が広がってしまうので、端をガムテープでとめるか、タコ糸を巻いて形を整える。全面がカラー印刷の新聞紙やガムテープを使い過ぎると、焼成の際にガスが発生して、粘土がほどよい色や硬さにならないときがあるので、不純物が含まれた紙類の使用は控えめにする。

このときに留意するのは、あらかじめつくっておいた粘土の玉を中に入れて込むことである。新聞紙の芯の隙間に、乾かしておいた粘土の玉をそっと入れる。外に近すぎて板状の粘土とくっついてしまう、力を加え過ぎて玉の形が平坦になってしまう、という場合もある。素焼きをすると、新聞紙が燃えて灰になり、玉だけが中に残る。振って玉が動くと言音が鳴る仕組みなので、小さな玉を入れ忘れる、粘土の壁面に玉がくっつく、新聞紙の灰を外に出せない、玉が外に飛び出してしまうといった理由で、音が鳴らないことがある。

粘土の玉を丸めた新聞紙の隙間に入れ込んだ後、板状にしておいた粘土でそっと新聞紙を包むようにする。板状から球体に近づけていくので、急ぐと形がくずれる、端に粘土の余りやしわができることになる。ゆっくりと押し返るようにして球体にしていく。形がくずれるのをさけるために、二人一組になって相互に協力して活動を進める方法もある。



図3. 芯の新聞紙を包んで球体にする。



図4. 球体から発想を広げる。

(3) 球体からの発想と見立て

土の鈴の原形としての球体ができたら、思いをめぐらして球体を何に見立てるかを工夫する。土に触れて丸めているうちに、一人一人の発想力が発揮される。既成の鈴のイメージから離れて、いろいろな発想をした方がユニークになる。顔、動物の体、魚、野菜、果物をはじめ、丸い形をしたものに見立てる。全体の形を少し変えたり表面に凹凸をつけたりしてもよい。粘土へらを使って目や口を強調すると、顔や動物の体に見えやすい。例えば球体にヒレをつけると魚に見え、羽根をつけると鳥に見えるようになる。鑑賞活動を通して、それぞれの発想のおもしろさが理解できる。

子どもが気軽に選ぶモチーフとして、アニメやマンガに登場するキャラクターがある。好みのキャラクターの模倣が続出することがあるが、せっかく粘土を使ってつくるので、人、動物、魚、鳥、野菜、果物をはじめ、いろいろなものを丸い形から発想できるようにしたい。

粘土で凹凸をつくる際に、指でつまみ出したときには、比較的保存しやすい。後で軽く押さえ、のせただけの場合には、乾燥したときにはがれてとれてしまうことがある。できるだけつまみ出すようにする、指先で粘土をしっかりと押さえるなどして、乾燥したときにもとれないようにする。



図5. 耳・口・目をつけて動物の顔にする



図6. 野菜や果物に見立てる

(3) 切り込み・乾燥

土の鈴の形が仕上がってきたら、球体に切り込みを入れる。焼成の途中に高温により新聞紙が燃え、粘土も変形をするので、球体の中の空気や温度が抜ける穴になる。粘土へらやバターナイフで新聞紙が見えるような深さの穴や切り込みをあける。

切り込みを入れることによって音の響きがよくなり、玉が転がる音が外に伝わる。切り込みが小さいと新聞紙の灰を外に出せないし、音の響きも限られる。逆に切り込みが大きすぎると、中の玉が外にでてしまうことがある。切り込みが生きものの口や目の位置と一致させると都合がよい。底など目立たない場所に切り込みをつくることのできる。成形後は、2週間程乾燥させる。

成形の際に、表面の装飾の接着が十分でないと、乾くまでにとれてしまう。粘土の部分がしっかりとくっついた状態にする。また、極端に厚みがある、切り込みの穴が小さいと言ったことが要因で、陶芸かまの中で割れてしまうことがあるので、高温による変形に耐えられるように、切り込みの大きさや粘土の厚みを調整しておく。

(4) 焼成

完全に乾燥したら陶芸かまで焼成をする。丁寧に作品を並べながら、空気が抜ける切り込みが十分にあるか確認をする。素焼きに適した750～850度で焼成をする。急に温度を上げるとわれやすい。最初は、陶芸かまの空気穴を開けておき、水蒸気を出すようにする。そして、新聞紙が燃える煙がおお

よそ出た後に、空気穴を閉めて温度を上げていく。

陶芸かまは保温性に優れているので、焼成温度から手で触れることができる温度に下がるのに1日以上かかる。常温に近くなったらかまから作品を外に出す。中に新聞紙の灰が残っているので、作品を振って切り込みの穴から取り出す。灰が外に出ると中で玉が動きやすくなって、コロコロ、カラカラといった土の鈴の音がでるようになる。それぞれの作品の形、見立てたもののおもしろさ、音色等を相互に鑑賞する機会をもてるとよい。破損した部分がある場合には、陶器を接着できる強力な速乾ボンドで補修をする。



図7. 魚のイメージの鈴



図8. 花のイメージの鈴

4. 陶芸の教材事例2 「デコボコの粘土の板づくり」

(1) 教材の着眼点

粘土は、ほどよい軟らかさがあるので、指や粘土へらなどを使って、デコボコやザラザラといった表面の感じを出すことができる。印刷物やテレビをはじめとした視覚文化が発達すると、視覚による情報が過剰になる。中村雄二郎は、視覚だけでなく全ての感覚を共通感覚と呼び、五感のようにいろいろな感覚を通した体験の重要性を示唆している⁹⁾。粘土の手触りを意識して表現する活動は、視覚というよりは触覚による表現であるといえる。粘土板や陶板というとタイルを思い出すことがあるが、タイルの場合には、釉薬による色の表現になる場合が多い。今回は、表面の手触りや凹凸に着目する点が特徴的である。

(2) 粘土の板づくり

まず、素焼きに適した粘土を準備し、粘土を押ししたりたたいたりして板状にする。その際に、粘土のもつ感触を体験的に理解するようにしたい。粘土を押しえたりたたいたりする音を出しながら、1cm程の厚さにする。薄いとは振動などで割れてしまうことがあるし、厚すぎても乾燥や焼成の際にひびが入りやすい。大きさは、A4かB5サイズの用紙を折って正方形をつくり、おおよその大きさの目安にする。1枚の粘土の板の中で、いろいろな表現上の試みをするができるが、時間的なゆとりがあるときには、2枚つくっておいて、それぞれ異なる表現をしてみるとよい。

(3) 表面を押し・刻むことによる表現

平坦な粘土の板の表面を指でへこますと跡になる。順に指先の跡を並べていくと、へこみの跡の並び方や集まりによって、模様ようになってくる。指のかわりに粘土へらの先端の形、鉛筆の六角形の跡などを並べると、表現に違いがでてくる。へこますだけでなく、指でつまみ出す、表面を刻むといったことも可能である。陶芸用のくし、フォークなどを使うと、手触り感覚や線の並びがおもしろい。模様や装飾をつけることを加飾というが、表面を工夫する活動も、加飾に属する。

一口に粘土へらといっても、形は多様である。普段は先端の形や押し跡に着目することはほとんどないが、今回は粘土へらを駆使していろいろな押し跡や刻み跡を工夫する。容器や鉛筆のキャップ、麻のひもや布、竹串や割り箸、枝や小石、タイルやおはじきなど、身の回りにあって、粘土の表面に跡をつけたり、線を刻んだりできそうなものを活用する。押さえ付けた跡の形を意識すると点で、スタンピングやコラージュ版画と共通点がある。

ドイツのデザイン教育者であるエルンスト・レットガーは、『土による造形—造形的手段よる遊び3—』において、さまざまな土の教材を紹介している。その中で「粘土板からの造形」として、指あとによる作品や、指を板に押し付けて線的な表現をした作品を取り上げている⁷⁾。レットガーは、押したりくぼましたりする表現を試みながら、多様な材料・型を使うよりも、むしろ、いろいろな形を指や手で表現することで、造形上の可能性をさぐろうとした。

普段、鉛筆などの描画材料を使って描くことは多いが、表面の柔らかさをいかして、へこます・つまみ出す・刻むことによって表現する機会は少ないので、慣れてくると子どもたちの興味を引き出すことができる。材料の選択、押し方、並べ方の違いによって、いろいろなデコボコや表面効果がうまれることに気づく。さらに、友達の粘土の板の表現を鑑賞することによって、それぞれの工夫や個性を体験的に理解することになる。

作品は2週間から1カ月程、日陰で乾燥させた後、陶芸かまで750～850度で焼成する。直射日光を当てたりして、乾燥を急ぎ過ぎると、収縮してひび割れがしやすい。テラコッタ粘土を使った場合には、赤茶色になる。本焼用の粘土を使用したときには、素焼きでは白っぽくなる。施釉のときに、白っぽい方が釉薬の色が鮮明に出やすいからである。



図9. 粘土の板に指や手で凹凸をつくる。



図10. 陶芸用のくしを使って模様をつける。

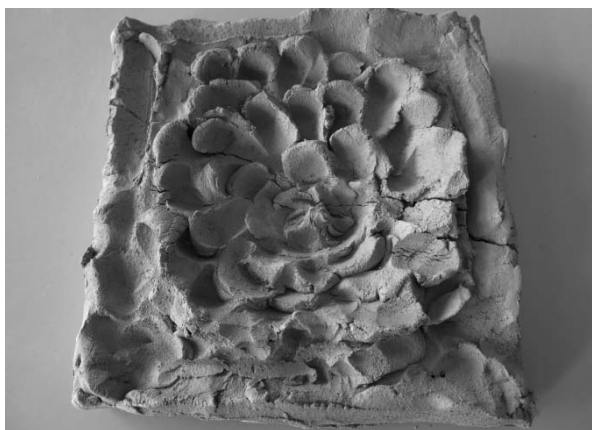


図11. 指で花のイメージに近づける。

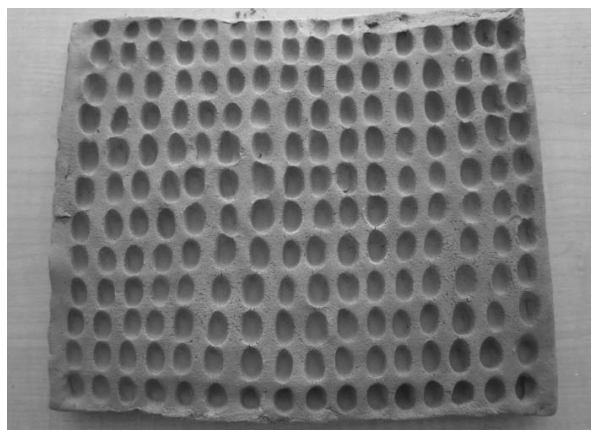


図12. 粘土へらでへこみを並べる。

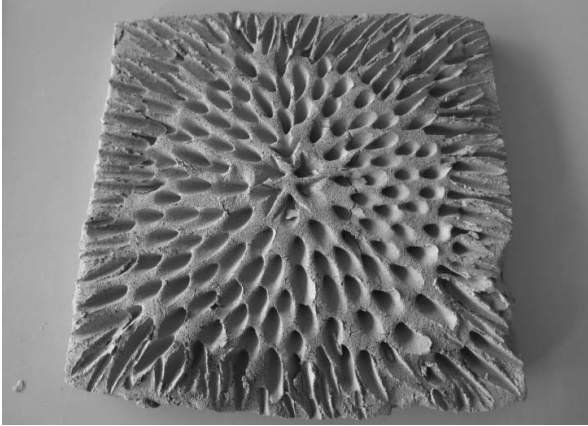


図13. 刻みによって広がる感じを表す。



図14. 刻みと丸い跡を組み合わせる。



図15. 形や刻み方を工夫する。

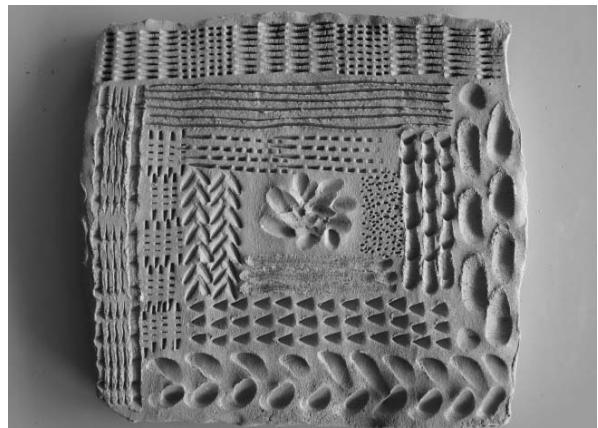


図16. 異なる模様を並べる・組み合わせる。

5. まとめ

今回は、750～850度の素焼きによる二つの教材について報告した。陶芸というと湯飲みや茶碗の制作を思い出す場合が多いが、釉薬をかけて本焼きをするには、施釉（釉薬がけ）、かま詰めとかま出しなど、いくつかの過程が加わる。それだけ時間と手間を要すると、授業実践に際してハードルをあげてしまうことになりそうである。焼成を業者に依頼することも考えられるが、準備から完成にいたるまで、できるだけ教師自らかかわるようにしたい。そうしたこともあって、とりあえず素焼きの教材にした。

大量生産の時代には、比較的安価な湯飲みや茶碗が店に並んでいるが、実際に使えるものを自分でつくろうとすると、技能的な習熟が求められる。もちろんそれを体験することは貴重な学習であるが、どの学校の図工・美術科の授業でも取り上げることができるわけではない。今回報告した二つの教材については、便宜的に焼成を大学の陶芸かまで行うことにはなったが、授業実践を通して、小学校の低学年でも可能であり、中学年や高学年では十分に実践ができることがわかった。

図工・美術科の授業では、年間を通していろいろな作品を制作する。作品によっては、展示しておいても子どもが鑑賞しようとしめないもの、家に持ち帰らずにそのまま置いてあるものも、残念ながらある。ところが、粘土でつくった陶芸作品の場合は、焼成のために乾燥しているときから、出来上がりを楽しみにする、完成作品の返却を待っていることが多い。それだけ粘土での造形活動への子どもの興味・関心が高く、作品に対するこだわりや愛着があることが理解できる。

今回、陶芸教材の実践研究をしていて感じたことは、焼成した参考作品等は残っているが、その教

育実践の記録や報告が少ないことである。陶芸の盛んな地域の特定の学校や教員による実践が目立ち、図画工作・美術科の教師が学校で一人だけという場合も多いので、世代交替とともにすぐれた教育実践の方法や成果が消えてしまうことになりかねない。陶芸の授業実践の過程や子どもたちの造形活動の様子をビデオで記録する、子どもたちの作品をデジタル化して教育資料として活用するなど、実践資料の整理や蓄積をする取り組みが求められる。

一方、心強いのは、各地域には陶芸家や職人がいて、子どもたちへの教育活動に協力的な方が多いことである。図画工作科を専門にしない学級担任であっても、地域の陶芸家や職人の方の協力があれば、ゲストティーチャーのようなかたちで招いて授業実践が可能になる。また、陶芸の設備をもつ地域の社会教育施設も増え⁸⁾、これまで以上に、学校と地域との連携や、地域の教育力の活用が大切になっている。

注

- 1) 辻 泰秀「ものづくり教育の実践的研究Ⅰ－伝統工芸の紹介－」岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）第56巻1号 2007
- 2) 辻 泰秀・石原正悟「ものづくり教育の実践的研究Ⅱ－地域の伝統工芸の体験学習－」岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）第12巻 2010
- 3) 陶芸で使う粘土は、自然から採掘したものである。地域や場所によって、粘土の種類や含まれる成分が異なる。粘土の産地では古くから陶芸が盛んであったので、その地名が粘土の名称であることが多い。焼成をするときと高温によって色が変わりやすいが、その色の変化によって意外性が出て、興味も深まる。
- 4) 中学校美術科の教科書にも、ひもづくりや板づくりのイラストが示されているので、知識としてそれらの技法を理解する機会はある。けれども、授業の中で粘土を使って実体験をする割合は、わずかである。
- 5) 陶芸かまは、学級や学年の作品を一度に焼成する容量をもつものになると100万円以上の予算になり、設置場所や電気工事などの内容によっては、追加分を見込むことになる。そのため、通常は、使用目的や明細など計画を示してから陶芸かまを購入する。
- 6) 中村雄二郎『共通感覚論』岩波書店 1979 を参照。著名なアメリカの美術教育研究者であるヴィクター・ローウェンフェルドも、造形表現のタイプとして、写実的な表現をするビジュアルタイプ（視覚型）と感じたままに表現しようとするハプティックタイプ（触覚型）を位置づけ、視覚だけに片寄らない造形活動に着目した。
- 7) エルンスト・レットガー『土による造形－造形的手段による遊び3－』宮協理訳 造形社 pp.34～47 1977。表面の凸凹、すなわちテクスチャーの教材の源流は、ドイツにおけるバウハウスの基礎造形の教育の中に見いだすことが可能である。モホリ・ナギ『ザ・ニュー・ビジョン』ダウィッド社 1967 における「表面処理」を参照。
- 8) 岐阜県の多治見市には、陶芸作品を中心に所蔵・展示する岐阜県現代陶芸美術館があり、鑑賞教室やワークショップなどの教育普及活動も充実している。全国の陶芸が盛んな地域でも同様に、陶芸作品の美術館や、陶芸の制作や焼成ができる社会教育施設を創設してきた。